

本年度のサマースクールは、5月9日から14日の6日間、プリンストン大学にて開催されました。

- 第2回サマースクール報告(1日目) The GHC Summer School 2016 Report (Day1)

2016年度のGHCサマースクールは、Jeremy Adelman教授(プリンストン大学)によるスクールの趣旨説明によって幕を開けた。そこではクロスナショナルな学びの提携の重要性について触れられた他、リージョナルな課題に対する捉え方に関していくつかの問いが提起された。その後、2つのセッションと1つのメソッド・セッションが行われた。

午前中の最初のセッションではSheldon Garon教授(プリンストン大学)がチェアを務めた。最初の報告はAenne Oetjen氏(ベルリン自由大学)が行った。「世界保健を組織する——国際連盟極東局とリージョナル・ヘルス・ポリティクス的发展 Locating World Health: The League of Nations' Far Eastern Bureau and the Development of Regional Health Politics」と題された報告は、アジア地域を対象とした国際連盟による衛生管理活動が、どのように構想され実行されていったかに関するものだった。この報告に対しては、「アジア」の範囲をどう定義するかについて質問が出た。加えて同時期に同じ目的で活動した他の団体との関係や、データ情報が知識へと変換されていく過程に関して議論が行われた。また、非ヨーロッパ言語で書かれ蓄積されてきたモノグラフをいかに研究に反映させるかという、全体にも関わる課題が提起された。

続いて藤本大士氏(東京大学)が、「西洋医学からアメリカ医学へ—近代日本におけるアメリカ人医療宣教師の言説の変化(1859–1945年) From Western Medicine to American Medicine: Changing Discourses of the American Medical Missionaries in Modern Japan, 1859–1945」と題して報告を行った。19世紀後半から1945年までの日本におけるアメリカの宣教師団体による活動を医学史の視点から捉えたものだった。アジアで西洋医学の伝播を行った西洋諸国側の実態がこれまで単純化されて捉えられてきた。それに対し氏は、ドイツ医学が支配的であった日本では、アメリカ人医療宣教師たちがドイツ医学に対抗するためアメリカ医学を振興しようとしていたことを指摘した。この報告に対しては、日本で活動したアングロサクソン系の団体間の協力関係の有無や、戦前の医療宣教の戦後の活動との連続性に関して質問が挙がった。

続いてチェアがAndreas Eckert教授(ベルリン・フンボルト大学)に代わり、報告が続けられた。「スペイン商業帝国の論理(1740–1762年) The Spanish Theory of Commercial Empire, c. 1740–1762」と題されたFidel Tavaréz氏(プリンストン大学)の報告は、18

世紀にスペインの商業帝国主義の原型となった著作物の分析に関するものだった。関連する文書の執筆者の思想背景をあわせて丁寧にみていくことで、その後拡がりを見せるスペイン商業帝国主義の根源に迫る試みである。質疑応答時間内には、“contextual intellectual history” とは何を意味するのかという質問が出された。またメモランダム等の記録をグローバル・ヒストリーにおいてどう位置づけ、扱っていくかといった問題提起もなされ、議論が行われた。

次に上村剛氏（東京大学）が、「1770年代ブリテンの反専制主義的政治思想—東インドとケベックの事例 *British Political Thought regarding Anti-despotism in the 1770s: The Case of the East Indies and Quebec*」と題する報告を行った。1770年代のイギリスにおける“despotism”をめぐる議論に着目し、政治思想史の立場からアプローチした。インドと、北米のとりわけケベックの両者に関する議論に着目し、両者の立法に共通する特徴を反専制として抽出したものであった。上村氏の報告に関しては、報告で取り上げられた以外の規制法の施行との関連性をどう扱うかという質問が出された他、アメリカの史料を併せて取り入れることに関する議論も行われた。

続くメソッド・セッションでは「ワールド・ヒストリー（と/か/の中）の）エリア・スタディー *Area Studies and/or/in World History?*」という議題のもと2つの報告と議論が行われた。Ines Zupanov 教授（社会科学高等研究院）の報告「南アジアのコスモポリタニズム——ソース、旅行記、言語（16–18世紀） *South Asian Cosmopolitanism: Sources, Itineraries, Languages (16th–18th centuries)*」はグローバル・ヒストリーの中の地域研究の位置付けに関するものであった。そこでは利用する史料の範囲の拡張と、時代区分の拡張がキーポイントとして挙げられた。Alessandro Stanziani 教授（社会科学高等研究院）は、「相互比較と歴史——ロシアの事例に基づく提案 *Reciprocal Comparison and History: A Few Proposals Based on the Case of Russia*」と題して報告を行った。西洋中心主義的傾向からの脱却と代替となる解決策の模索の試みとして、ロシアの農奴制にまつわる例が取り上げられた。一般化したモデルを作り出すのではなく、特定の地域に特化した歴史の流れと全体のダイナミクスを調和させるために、相互比較の新たな定義を考えることの重要性が強調された。

議論の時間には、研究対象を1つの地域から他の地域へと拡張する際に生じる問題や、いかに単なる比較になることを避けるかについて意見が挙がった。他にもフィールドの違いに関して議論が行われた。また、ディシプリンの構成に関する問いも挙がり、「地域研究」の定義に関する各国の歴史学界の認識の違いを、前提として共有する必要性が述べられた。

(文責・原田明利沙)

- 第2回サマースクール報告(2日目) The GHC Summer School 2016 Report (Day2)

サマースクール2日目は、2つのセッションと1つのメソッド・セッション、そしてトレントンへのエクスカージョンが行われた。第1のセッションは、Joël Glasman 博士(ベルリン・フンボルト大学)がチェアとなり、16-17世紀のヨーロッパにおける知識の循環についての2つの報告が行われた。最初は、Oury Goldman 氏(社会科学高等研究院)が「世界を捉える——16世紀フランスにおけるグローバルな知識のエージェントとしての出版者、本屋、翻訳者 *Grasping the World: Printers, Booksellers and Translators as Agents of Global Knowledge in Sixteenth Century France*」というタイトルで報告をおこなった。氏は翻訳学(translation studies)の視点から、パリとリヨンというフランスの2つの都市に着目し、その場所でさまざまなアクターによって知識が循環していたことを、文献を丁寧に読み込むことで明らかにした。氏の議論の特徴は、当時のフランスを知識生産の場という視点から議論するというより、周辺の国や地域での知識の交流を媒介した場所として捉えた点であった。質疑応答では、出版者は政治的に利用されやすいがフランスの場合はどうであったか、最近議論が盛んなグローバル・ルネサンスという分析視角といかに関連するか、フランス例外主義に陥ってしまわないか、パリとリヨンの事例はフランスの他の都市における出版事業とどう違うのかなどが議論された。

次に、Benjamin Sacks 氏(プリンストン大学)が、「都市のスパイ活動——植民地都市をスパイ、複製、借用する(1704-1731年) *Urban Espionage: Spying, Copying, and Borrowing Colonial Cities, 1704-1731*」という題目で報告した。氏の基本的な問題設定は、なぜ植民地都市はこれほどまでに似ているかというものである。氏は、都市史研究においてグローバル・ヒストリーの視点が欠落していることを指摘し、植民地都市設立にあたって多国間の知識の循環を描くことを目指す。具体的には、1713年のユトレヒト条約に伴い、フランスが支配していたキツ島の領土を、イギリスが完全に支配することになった際、イギリスがフランスにおける要塞に関する技術をいかに学び、活用したかを明らかにしている。質疑応答では、盗用ではなくスパイという言葉を使った理由は何か、その地に元々住んでいた人たちの反発はどのようなものであったか、都市ではなく居留地とは呼べないのかなどが議論された。

第2のセッションでは、Ines Zupanov 教授(社会科学高等研究院)がチェアとなり、20世紀転換期における外交・文化交流に関する2つの報告が行われた。まず、原田明利沙氏(東京大学)によって「華南権益をめぐる近代中仏外交——仏領インドシナの形

成と関連して *Modern Sino-French Diplomacy over the Interests in South China in Relation to the Formation of French Indochina* というタイトルで報告が行われた。氏はまず、中国とヨーロッパの外交史において、イギリスとの関係に注目するものが多く、フランスとの関係については研究が少ないことを指摘する。そのことを踏まえ、世紀転換期の華南をめぐってフランスと中国、さらには日本がどのような争いをおこなったかを、マルチアーカイバルな手法で議論している。具体的に着目する地域は、広州湾・福州・仏領インドシナの3つである。質疑応答では、広州湾とマカオへの近さから同地へのポルトガルの影響の有無、中国という言葉と清朝という言葉の使い分け、日本における中国研究との関わりなどが議論された。

次に、Natalie Pashkeeva 氏（社会科学高等研究院）によって、「19-20 世紀における YMCA のグローバル・ヒストリーとナショナル・ヒストリーを書く *Writing of « Global » and of « National » Histories of the Young Men's Christian Associations from the Third Quarter of the Nineteenth Century and in the Twentieth Century*」というタイトルで報告が行われた。発表のねらいは、ナショナル・ヒストリーおよびグローバル・ヒストリーというそれぞれの視点で YMCA という国際的な運動を捉えた際の可能性や限界について議論することである。具体的には、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、YMCA が自らの活動を「グローバル」なものであると規定していく過程を描いている。質疑応答では、YWCA などへの着目によりジェンダー史研究との接続の可能性があること、グローバル・ヒストリーをおこなう上で、必ずしも本文中でグローバル・ヒストリーという必要はないこと、ウィルソン大統領とジョン・モットによる革命後のロシアへの YMCA 活動などとの関連の有無について議論された。

その日の最後となったメソッド・セッションでは、Jeremy Adelman 教授（プリンストン大学）が「世界システム論はグローバル・ヒストリーに役立つか？ *Are World Systems Helpful for Global History?*」というタイトルで報告をおこなった。このセッションのアサインメントとして、Jeremy Adelman, “Mimesis and Rivalry: European Empires and Global Regimes,” *Journal of Global History*, 10(1), 2015, pp. 77-98 が課された。その論文は、世界システム論の代替案となるような視点を、ヨーロッパ中心主義に陥らずにグローバル・ヒストリーの観点から提出することを目指したものであった。レクチャーでは、中心・周縁モデルではなく、多中心モデルに立った歴史研究の可能性について議論が行われた。

ディスカッションでは、まず、グローバル化という現象とメディアの関係が議論された。Adelman 教授の論文およびレクチャーは、15-16 世紀におけるグローバル化と印刷革命の関係に言及していたが、フロアからは 20 世紀の視覚メディアの増加とグローバル化の関係の重要性も指摘された。それに関連して、マクルーハンやソンタグなどの研

究を、あらためてグローバル・ヒストリーと関連づけて捉えることの意義が議論された。また、Adelman 教授は科学史における世界的な知識の循環に関する研究をひきながら、ヨーロッパ中心主義の相対化の可能性を示唆していたが、フロアからは知識生産においても、帝国は植民地の情報を搾取するという非対称的な関係があったことが指摘された。

会議のあと、エクスカーションとして、現地のボランティア帯同によりトレントンの歴史地区を探索した。今回、会議の場所となっているプリンストン大学はニュージャージー州にあるが、その州都がトレントンである。かつては栄えていたトレントンであるが、現在の人口は8万人となり、人口減少にあえいでいる。しかしながら、復興計画によって市の活性化がはかられ、その具体策として歴史的建築物の復元が進められている。今回案内してくれた方もボランティアで観光者に市の歴史の説明をおこなっていた。たとえば、Old Barracks Museum（1758年から1759年にニュージャージー植民地として建てられ、1990年代に復元）やPetty's Run Archaeological Site（1730年代から1870年代頃の産業に関する遺構）を訪問し、Masonic Temple（1927年建立）内にあるトレントンの歴史的建築物の保存・復元を担当している事務所を訪れ、関係者からトレントンの都市計画に関するこれまでの活動と今後の展望について話を聞いた。

（文責・藤本大士）

- 第2回サマースクール報告（3日目）The GHC Summer School 2016 Report (Day3)

サマースクール3日目は、1つの特別セッションと1つのセッション、そしてフィラデルフィアへのエクスカーションが行われた。午前中は、昨年度の参加者達を交えたコラボラティブ・ジャーナル執筆の進捗状況の報告会と、研究報告1つが行われた。

「グローバル・ヒストリー（コラボラティブ）の現状はどのようなものであるか？ What Does Global History/Global History Collaborative Looks Like?」という議題のもと始められた報告会は、Jeremy Adelman 教授（プリンストン大学）の司会で進められ、昨年度のサマースクール参加者達もインターネット電話を通してベルリンや日本等の各国から参加した。昨年度の参加者達は、研究テーマが比較的近い者同士で組み共著論文の執筆に取り組んでいる。彼らの中からは、取り組みに伴う「難しさ」が聞かれた一方で、進展の手応えや今後の展望に対する前向きな姿勢も見られた。問いを一般化することの難しさの問題については、プリンストンの会場から、まず1つのテキストに絞って取り組み始めることを勧める声が挙がった。また、共著に取り組むにあたりまず自身のフィールドを明確に問題化することの重要性が指摘された。今年度の参加者からは、共著論文を出版

する言語について質問が挙げられ、昨年度の参加者も交えて議論が行われた。共著論文執筆の試みが生み出す glocal な取り組みのおもしろさに着目する発言もあった。

次に、島田竜登准教授（東京大学）がチェアを務め、Maxence Klein 氏（社会科学高等研究院）の報告「ベルリンからエルサレムへ——ユダヤ人シオニストグループ Jung Juda の文化、分離、アイデンティティ（1912–1917 年） Berlin Seeks Jerusalem: Culture, Secession and Identity in the Jewish Zionist Youth Group Jung Juda (1912–1917)」が行われた。ユダヤ人の若者によって構成された団体 Jung Juda の形成背景と 20 世紀初頭における活動の拡がり、その「混成性」に着目しつつシオニズムに関する議論と関連づけながら分析したものだ。Jung Juda がドイツの若年層の団体から受けた影響についても触れた本報告に関しては、人々の間の社会的つながりについて議論が行われた。また、「政治的」「非政治的」の区別について彼らが自覚的であったのか、“political implication”をどう捉えるかについて質問が出された。

（文責・原田明利沙）

午後はエクスカージョンであり、バスでフィラデルフィアに向かった。市の中心部からはじまるウォーキングツアーにまずは参加した。ペンシルヴァニア州議事堂などもめぐったが、このツアーはフィラデルフィアの中心的な建物をめぐるのでなく、街中に多数存在する建物の壁に描かれている絵をひたすらめぐるという点で特徴的だった。合計十数点の絵のひとつひとつについて、誰が描いたのか、誰が描かれているか（例えばリンカーンの壁画）、どのような意味が込められているか（例えばエスニックグループ間の自由と調和）といった説明がツアーガイドによってなされた。その後、一行はムター博物館に向かった。この博物館は 19 世紀半ばに設立された由緒あるもので、様々な人体標本、骸骨、奇病のコレクションが所狭しと展示されていた。

（文責・上村剛）

- 第 2 回サマースクール報告（4 日目）The GHC Summer School 2016 Report (Day4)

サマースクール 4 日目は、1 つのメソッド・セッションと 2 つのセッションとが行われた。午前中 1 つ目のセッションはメソッド・セッションであり、羽田正教授（東京大学）、杉浦未樹教授（法政大学）による報告が行われた。「グローバル・ヒストリーにおけるポジショナリティと言語 Positionality and Language in Global History」と題された報

告は、ナショナル・ヒストリーと重畳したかたちでグローバル・ヒストリーを論じることの可能性、歴史を論じる言語が英語に偏っていることの現状の問題指摘を中心としたものであり、グローバル英語やグローバル・シティズンシップといったタームが用いられながら、未だに西洋中心的な性格から脱却しきれていないグローバル・ヒストリーのあり方に再検討を迫るものであった。これに対して、unification と integration の異同や civilization といった語の語用法について、また、ナショナル・ヒストリーとの重畳が本当に可能か、self/others の線引きを解釈者は前提とせざるを得ず、nationalistic にならざるを得ないのではないか、ナショナル・ヒストリーを越えた視点とは誰がどのように獲得しうるのかといった質問と議論がなされた。

午前中 2 つ目のセッションは、Sebastian Conrad 教授（ベルリン自由大学）がチェアとなり、第二次世界大戦後のアメリカと関連した 2 つの報告が行われた。まず、Marvin Menniken 氏（ベルリン自由大学）が「保守主義、冷戦、カウンターカルチャーの間——カリフォルニアのアメリカ在郷軍人会（1950–1980 年） Between Conservatism, Cold War and Counterculture: The American Legion in California, 1950–1980」と題して、カリフォルニアの在郷軍人会が保守主義において果たした役割を論じた。氏によれば、カリフォルニアの在郷軍人会は、従来考えられていたように、単に退役軍人の圧力団体というのではなく、地元のコミュニティを巻き込んだ保守主義（伝統主義、反共産主義、リバタリアンの要素から成る）の性質を有していたとされるという。この保守主義は脆弱なものであり、ニューレフトとの対抗の下に置かれていた。この報告ののち、カリフォルニアという場所の設定についてその妥当性と、それと関連して当該地域が有していた特徴を中心に議論がなされた。

2 つ目の報告は Emily Riley 氏（プリンストン大学）による「対外援助に関するヨーロッパ間協力——OEEC、マーシャル・プランと戦後ヨーロッパ Intra-European Cooperation on Foreign Aid: The OEEC, Marshall Plan, and 'Post-war Europe'」であった。氏はマーシャル・プランに関する 2 つの見解、すなわち、マーシャル・プランをヨーロッパの救世主とする、若しくはアメリカの覇権追求のための政策とする見解を共に斥け、より広くヨーロッパ間の文脈で捉えなくてはならないと主張した。そして今回の報告ではイタリアのケースが実証のために検討された。報告ののち、似た状況下にあった日本でマーシャル・プランが実行されなかったのはなぜか、なぜイタリアなのかという疑問や、また「ヨーロッパ」と言った際に東欧が欠落しているという指摘が報告者になげかけられ、主にマーシャル・プランと地域性について議論がなされた。

昼食休憩後の午後のセッションでは、Alessandro Stanziani 教授（社会科学高等研究院）をチェアとした 2 つの報告が行われた。1 つ目は Jan Severin 氏（ベルリン・フンボルト

大学) の「ドイツ植民地領西アフリカにおける男性同性愛と男性性 Male Same-Sex Desire and Masculinity in Colonial German Southwest Africa」という報告であった。なお報告者は体調不良につきプリンストンには来られなかったため、前日のセッション同様に、オンラインによる報告と質疑応答が行われた。西アフリカ植民地領における男性性とドイツ帝国のそれとの異同を報告者は検討課題とし、それに答えるにあたり、ブリテンの植民地との比較も踏まえた、同性愛政策の異同を精密に検討するというアプローチをとった。その結果、西アフリカ植民地領における男性性はドイツ帝国本土よりも異性愛的な特徴を付されていたことが明らかとなった。質疑応答では強姦の態様について、ドイツの植民地法の形態とその特徴について、またピンチョンなど同じテーマを扱った文学史料を用いたことがあるかといった質問がなされた。

本セッション2つ目の報告は Abigail Kret 氏 (プリンストン大学) による「新しい十年の発展を再考する——チリにおけるフォード財団 (1969–1980 年) Rethinking Development for a New Decade: The Ford Foundation in Chile, 1969–1980」であった。この報告は開発と民主主義、開発と市場の関係について、更にはグローバル経済における構造変動の要因に関する問いを考察するために、フォード財団アーカイブの史料に依拠しつつチリの開発においてフォード財団が果たした役割を明らかにするものであった。この報告ののち、開発のために現地の共同体がなしたこと、独裁と開発の関係、フォード財団の有していた専門知識の内容とその意義についてなどに関して質問がなされた。

(文責・上村剛)

- 第2回サマースクール報告 (5日目) The GHC Summer School 2016 Report (Day5)

サマースクール5日目は、1つのメソッド・セッションと1つのセッションが行われた。まず、ベルリン拠点の Andreas Eckert 教授 (ベルリン・フンボルト大学) および Sebastian Conrad 教授 (ベルリン自由大学) によって、「グローバル・インテレクトチュアル・ヒストリーとは何か? What is Global Intellectual History?」というタイトルでメソッド・セッションが行われた。このメソッドに関するアサインメントとして、Samuel Moyn and Andrew Sartori, “Approaches to Global Intellectual History,” in Samuel Moyn and Andrew Sartori, eds., *Global Intellectual History* (New York: Columbia UP, 2013) および Sebastian Conrad, “Ch. 10 Global History for Whom? The Politics of Global History,” *What Is Global History?* (Princeton: Princeton University Press, 2016) が課された。最初に Eckert 教授から、グローバル・ヒストリーという考えが広く共有されつつあること、そして、そのため、

グローバル・インテレクチュアル・ヒストリーというサブフィールドが生まれていることが説明され、グローバル・インテレクチュアル・ヒストリーがグローバル・ヒストリーに対してどのような貢献ができるかという問題提起がなされた。Conrad 教授からは、自身が日独歴史理論を専門としていることから、非西洋中心主義的なインテレクチュアル・ヒストリーが少ないという問題を指摘していた。

その後のディスカッションでは、同時期に異なる地域で同じような思想が何の交流もなしに生み出される現象をいかに理解すべきかをめぐって多くの議論がなされた。また、Conrad 教授の問題意識を引き継ぎながら、アジアのインテレクチュアル・ヒストリーを欧米のインテレクチュアル・ヒストリーを研究している者に対して、西洋中心主義に陥らずに、どのように読ませるよう説得するかという疑問も投げかけられた。さらに、グローバル・ヒストリーの観点から古代・中世の思想を読み解くことの可能性と、アナクロニズムに陥ってしまう危険性などについて議論が行われた。その他にも、受容と創出 (reception and invention) の関係、現在主義と歴史主義との関係をめぐって意見が交わされた。

サマースクール最後のセッションは、杉浦未樹教授 (法政大学) がチェアをつとめ、20 世紀における東アジアおよびヨーロッパの思想史に関する報告がなされた。まず、Susanne Schmidt 氏 (Cambridge University) は「ミドル・クライシスの可能史——ニューヨーク、ハンブルク、ムンバイ Possible Histories of the Midlife Crisis: New York, Hamburg, Mumbai」と題した報告をおこなった。氏は、Gail Sheehy による *Passages: Predictable Crises of Adult Life* (1976) という著作が世界各国で翻訳されていく過程に注目し、その過程でジェンダー性が取り除かれたりしながら世界中に流通していったことを示す。それにより、メディア研究とジェンダー研究の両方を架橋しようと試みている。質疑応答では、氏が論文内で注目した国や都市以外にも Passage が翻訳・流通していたという情報が提供され、誰がどのような理由でその翻訳をおこなったかの各国比較の可能性が議論された。その他にも、ミドル・クライシスに対する精神科医の反応や *Passages* に各地で関わったフェミニストの特徴の違いなどについての質問が行われた。

最後に、Dongxiang Xu 氏 (社会科学高等研究院) が「アジアは 1 つ——アジア主義と中国および日本の「国粋」知識人集団 Asia is One: Pan-Asianism in Two Chinese and Japanese Intellectual Groups of 'National Essence」というタイトルで報告をおこなった。Xu 氏の関心は、アジアという概念がいかに中国において形成されてきたかを描くことにある。今回の発表では、中国と日本のアジア主義団体として、1908 年に日本で設立された政教社、および、それに影響を受けながらも異なる展開をした中国の国粋派の活動に注目する。氏の議論で興味深い点が、1908 年に国粋派のメンバーが東京で設立し

た亜洲和親会には、国家主義と国際主義が共存する思想を見出すことができると指摘した点である。フロアからは、ヨーロッパにおけるアジアという概念の使用が、アジアにおけるその概念の使用に影響を与えたかどうか、アジアという概念がアジアでいつどのように使われ始めたか、アジア主義においてジェンダーはどう位置づけられるかなどの質問がなされた他、アジア内部でも日本とインドではアジアという概念に与えるニュアンスが異なるというコメントが行われた。

5日間にわたるサマースクールの総括では、参加した学生と教員の間で、サマースクールの感想や可能性に関して自由に意見が交換された。まず、学生たちが参加を通じて得た経験が共有された。たとえば、メソッド・セッションという今年からの新たな取り組みに対し、学生からの好反応が次々に述べられた。というのも、このセッションの導入より、グローバル・ヒストリーに関する最低限の知識や分析視角を参加者の間で共有することができたからである。また、各国の議論のスタイルの違いがあることもわかった。また、自国ではあまりなじみのないトピックを聞いたことにより、時代や地域を超えた共通点・相違点について考える良い機会となった。さらに、グローバル・ヒストリーをおこなう上での言語の問題やそれを解決する1つの方法としての共同研究の可能性が議論された。とくに、後者は昨年のサマースクール参加者によって、複数著者の共著による論文の投稿が目指されている。

学生からはさらに、次回以降のサマースクール開催にあたっての提案がなされた。たとえば、参加者があらかじめ提出したペーパーが、博士論文のプロポーザルであったり、博士論文の一部の章であったりと、人によって違いがあったため、最初のページでなぜそのペーパーをグローバル・ヒストリーの会議で議論する必要があるのかをある程度書くことと議論がスムーズになるのではないかという提案が行われた。それに関連して、セッションのモデレーターが、報告がいかに関係するグローバル・ヒストリーとつながるかを説明し、ある程度のディスカッションの方向性を示してはどうかという提案がなされた。それに関連しメソッド・セッションでのレクチャーにおいていくつかの問題を設定することの可能性も議論された。

以上の発言を踏まえ、教員からもサマースクールの改善点が述べられた。第一に、提出するペーパーの形式をもう少し共有すること、および、提出されたペーパーに対し教員がフィードバックを与え、学生がそれに応えることなどがあげられた。第二に、メソッド・セッションの内容を、参加学生のペーパーに即して微調整をおこなうことなどがあげられた。そのような改善点を踏まえ、来年のベルリン拠点によるサマースクールの抱負が述べられた。

(文責・藤本大士)

- 第2回サマースクール報告(6日目) The GHC Summer School 2016 Report (Day6)

最終日はニューヨークへのエクスカージョンが行われた。希望者で集まってプリンストンから電車に乗り、午前中は現代アート作品のコレクションで知られるグッゲンハイム美術館を訪れた。特別展「それでも天から嵐は吹く：中東と北アフリカの現代アート But a Storm Is Blowing from Paradise: Contemporary Art of the Middle East and North Africa」が開催中で、学芸員の方の解説を受けながら、写真や映像作品、彫刻など様々な作品を鑑賞した。報道写真に色付けを施したアート作品が印象的であった。午後は自由行動で、いくつかのグループに分かれ週末の街を散策した。初めてニューヨークを訪れるメンバーも多く、著名な建築物をいくつか見て回るなどした。天候に恵まれた中で公園に足を運ぶ者もあった。夜はいくつかのグループが合流して夕飯をとり、ニューヨークの印象やサマースクールでの議論を振り返るなどして交流を深めた。短くも充実したニューヨークでの滞在を終え、電車でプリンストンの宿舎へと戻った。

(文責・原田明利沙)